

分
主
日
陽
日
一
九
九
三
年
一
月
日

新春放談

ことし世界はどう動く

協会顧問・元国連大使 中川 融

東京外大教授 中嶋 嶺雄

NHK解説主幹 平野 次郎

司会・協会講演委員長 飯島 博

飯島(司会) 口火として、正月でもありますが「クリントンさんの船出で、アメリカの舵取りはどういうことになるのか」というところから。

中川先生、十二年ぶりの民主党政権をどういうふうにご覧になりますか。

中川 今度のクリントンの勝利というのは、普通の政権交代以上の意味があるような気がしますね。アメリカはナンバーワンで、非常に順風満帆と言いますか、アメリカの優勢ということを疑わずに、今世紀始まってからずっと来たとはいえますね。

それが今度のクリントンというのは、要するにそれに疑いを持ち出して、ある意味でアメリカ国民が心配をし出した。あれだけブッシュが湾岸戦争で勝っていながらね。わずか一年ちょっと前までは九〇%とかいう、非常に大きな国民の期待を担っていたにかかわらず、どんどん落ちちゃっ

て、三〇%を割るような人気になって、ついに頹勢挽回できず、今度の敗戦になってしまった。どういうことが理由か。一番よく考えられるのは、「アメリカの景気が悪いときには現職の大統領が負ける」というジンクスがある。そのパターンではあるけれども、やっぱりそれ以上のものがあるんじゃないか。

クリントンが一月の二十日から政治を始めるわけですが、そのクリントンの四年の間に本当に経済の活性化に成功するかどうかが。

また経済の活性化ばかりじゃなくて、クリントンは教育を刷新するだとか、犯罪を少なくするだとか、そんなことまで言ってるわけですね。だから、はたして目につくような成功が収められるかどうか、これは非常に疑問だと思いますね。

今のアメリカ経済を持ち直すためには、予算を削って赤字をなくさなきゃいけない。にもかかわ

らず、新しいアメリカを作ることからいえば、お金を出さなきゃいかん。この二つの約束をしているわけですから、これはやっぱり一期じゃ無理で、二期あるいはさらに民主党政権がしばらくが続くんでなきゃ出来ませんね。

しかし、いろんな客観情勢からいえば、クリントンが政権を握るということは、いい選択をしたんじゃないですかね。

もちろん、いろんな問題に波及して行きますが。日本に対する風当たりが強いかどうか、これは相当強いと思います。したがってそんなことは覚悟しなきゃいけないけれど、全体として見れば、大きな歴史の流れからみて、クリントン政権というのは来るべくして来た、ということじゃないでしょうか。

平野 今、中川さんが、単なる政権交代ではないとおっしゃった。私なりに解釈するとですね、正に単なる政権交代ではなくて、世代の交代というのが象徴的に表れているような気がするんですね。四六歳、アメリカの大統領としては史上三人目に若い大統領になりますから。

アメリカというのは世代が代わることに、よりアメリカ化していくという、国家としての特徴を持っているもんですからね。

だから、旧世代でやってきたアメリカがもう行き詰まってしまったから、ここでちょっと新しい世代に変えて、もう一度やり直してみようじゃないかという選択が、ひょっとしたらアメリカ人の心の中にあっただんじゃないか、という気がするん



⑤から平野次郎、中川融、二人おいて中嶋嶺雄、飯島博の各氏

ですね。
そういう意味では、四三歳で大統領になったケネディーに似てるんです。ただ、どこが違うかというと、ケネディーの時代というのは、一九五〇年代の後半から六〇年の初めにかけて、国力がものすごく大きかった。だからあの当時のソ連と宇宙開発競争もできたし、平和部隊のようなこともできた。

ところが、今、アメリカは財政的にアップアツ

プの状態にありますから、余力があった時代にできたようなことができるかというと、できない可能性のほうが大きいんじゃないか。それが一つ、クリントンに大きな足かせになりますね。

もう一つは、ケネディーの場合は上院議員を勤めて、ワシントンの権力構造の中のメカニズムを知っていましたね、どこのボタンを押せば誰が動くかという。ところがクリントンはそれがわからないです。ただ、副大統領のゴアがその部分を受け持つんでしょけれども、そのあたりがちょっと未知数ですね。

それから経済で言いますとね、面白いことがあったんですよ。ちょうど投票日の前後二週間ほど、私アメリカへ行って、いろんなところで人と会ってたんですが、経済学者のほとんどがクリントン支持で、テレビコマーシャルを出しているわけですよ。我々が知っている経済学者がほとんどです。ブッシュを支持している経済学者は、ビルトン・フリードマンぐらいしかいないんですね。

その中の一人が例のポール・サミュエルソンというMITの先生で、この人と話をしましたら、「私はクリントンを支持しているんだけど、クリントンになったからと言ったって、経済政策がそんなに変わるとは思っていないよ」と言うんですね。

ですから、なんというのか、大統領が変わったからすぐすべてが変わる、というような状況ではないんだらうと思いますね。

飯島 中嶋先生はどう見ますか。

ブッシュは歴史に残る

中嶋 そうですね。ブッシュがああいう惨めな敗北をしたわけですけれども、僕はひょっとするとブッシュというのは、再び歴史に残る大統領として評価される時期がくると思います。特にその後半を見ますと、三つの大きな功績があったと思うんです。とにかくマルタ会談（八九年一月）、それによって冷戦を終焉の方向に大きく持って行ったということ。それからもう一つは、言うまでもなくソ連崩壊のプロセスにおいて、内政干渉ギリギリのところまで、一昨年の八月「クーデターを許さない」ということを非常に強く言ったということ。七〇年も続いた大共産帝国が解体していくのに、「軍やKGBが必ず出てきて、それを抑えるだろう」と言ったソ連が、わずか三名の死者しか出さないうで崩れていったということは、非常に大きな力を発揮したんじゃないか。

それからもう一つは湾岸戦争。いろいろと評価はありますけれど、やはり決断したということ。これは非常に大きかったと思うんですね。さすがアメリカだと私は思いました。しかしながらそこがいれば歴史の皮肉なんだけれども、冷戦の勝利者で、それだけの功績を遂げたにもかかわらず、アメリカ国民はブッシュを支持しなかったですね。ここに現代のアメリカが抱えている問題がある。

るんじゃないか。

実は冷戦には勝ったにもかかわらず、冷戦の勝利を導いた最後の立役者をあんな惨めな形で敗北に持ち込んだところに、アメリカ自身の正当性の根拠が問われているんじゃないかと思うんですね。それが経済とか内政問題の混乱になっているわけだけれども、そこで、やっぱりクリントンのほうに票がいったんだろうと思うんですよ。

ただ、アジアとの関連からいうと、中国政策はものすごく大きく変わるんじゃないかと思うんです。大統領候補就任受諾演説の中で、彼は「バゲダットから北京までの無法者」と言ったわけですよ。いわばデモクラットの民主党は全般的に中国の人権問題についても非常に厳しいわけですね。議会がそうですから、クリントン自身もそういう立場を取るんだろうと思いますね。

それは大統領になって、いろいろな国務省のアドバイスがあったりして少し変わるかも知れないけど。今のクリントンにとっては、サダム・フセインよりむしろ鄧小平のほうが酷いじゃないかという認識があると思うんですから。

ブッシュでさえも、最後のときには変わってきましたよね。やっぱり台湾を選んでいったわけですね。F-16の台湾への売却。中国はそのことに非常に警戒的で、ピリピリしていますから、アジアにかなりいろいろな問題が起こる。

飯島 今、先生のお話で思い出すのは、世界大戦でチャーチルがあれだけ頑張って勝ったのに、選挙をすぐやったら負けちゃうわけですよ。

ね。そしてポツダム会談に出られなくなっちゃう。やっぱり、アングロサクソンというのはそういうところがあるんですかね。

クリントンの成功を期待

中川 今、飯島さんがいみじくも言われたそのチャーチルの例で、私もすぐ思い出してね。

第二次世界大戦、もちろんアメリカもあとから入って、非常に貢献したんだけど、とにかく初めから終わりまで戦い抜いたのはチャーチルですね。



そのチャーチルが、勝ったわずか二か月か三か月後に総選挙で負けちゃったというのは、今、中嶋先生が言われたように、ちょうどあれだけ貢献していたブッシュがやられたのと、非常に似ている。

それでそのあと労働党内閣になってから、いわゆる福祉国家をずーっとやりましたね。それで大変な実験をやって、ある程度は成功したんだけど、それが行き過ぎて、マーガレット・サッチャーになるとちょっと後戻りですよ。それと同時に、イギリスの国力というのが大変落ちてしまっていて、福祉国家を作ったけども、今、福祉国家自体も、例えばドイツとかオランダに追い抜かれていくような格好ですね。

アメリカはまだそこまではないと思うけど、イギリスはあれからインドを独立させ、アフリカを独立させ、英帝国というのは解体してしまいましたね。

したがって、アメリカの友人としては、ぜひ今度のクリントンがとにかく成功することを期待しますけれどね。ちょっと長い歴史で見ると、ちょうど二十一世紀になるときの、世界全体の転換期を象徴するような状況ですね。

飯島 アメリカの動きはこれから我々としても注意深く見守っていくことは非常に大事なことです。が、今のロシア、かつてのソビエト連邦です。

極端な言い方をすると、「バルカン半島みたいになっちゃうぞ」というようなことを言う人がいるんですが、平野さん、ヨーロッパをずーっと見られていてどうですか。

平野 日本で考えているよりもずーっと深刻なんです。ね。といいますのはヨーロッパは地続きですから、ロシアも含めた旧ソビエトの人々が、いい生活を求めて西へ西へと移動してまでする。

ドイツなんか正にその最大の被害と言いますか、一年間で十五万人も東側から亡命の申請があるわけですからね。

そういう人たちがどんどん合法的あるいは非合法的に入ってきて、せっかく貯めたドイツの富を落っことしてしまった。だから、ドイツも含めた西ヨーロッパから見ると、旧ソビエトを

いかに安定させて経済的にしっかりした基盤を作って、そこにその人々を定着させるかということが一番大切な問題なんです。ですから、対ロ支援というのを一生懸命言ってるんです。アメリカもそれを理解して同じことを言ってるんですが、日本がどうしても乗ってこない。そこが日本と欧米との一番の違いだろう、というふうに見えますね。

ロシアが固まるには10年

中嶋 僕もやっぱり、ロシアの混迷というのは今後長い時間がかかると思いますが、確かにこの間まではものすごくソビエト、ソビエトでね。ソ連へ行くと「ソビエト連邦がいかに素晴らしいか」ということばかり言っていた。

そして特にブレジネフの十八年間というのは、我々から見ると酷い状況であるにもかかわらず、それを誇示してましたからね。基本的にはやっぱりそのツケは、自分たちで払ってもらわなければいけないと思うんですね。

いくら対ロ支援をしたり、経済協力をしても、一種の臓器移植みたいなもので、そう簡単にいかない。それから今おっしゃったような民族問題というのは、一番原点のところでもすこい対立が起こっちゃってるわけですから、これを修復するのも簡単ではない。

私はそういう点では非常に深刻に考えるんです。ただそのことと、ポリシーとして日本が対ロ

シア支援をしなくていいかどうかというのは、大変議論の多いところですね。まあ日本の政府・外務省も含めて、大方は北方領土問題との絡みがありますから、厳しい見方だと思いますがね。

ただ、日本はやっぱり欧米の一員であるという国際的義務があるわけで、国際貢献というのは、カンボジアのPKOだけではないんで、やはり西側諸国の一員としてやることをやっておけば、そのことが長期的には日本に対する信頼を高めるんじゃないかな、という気がするんですね。

領土と対ロ支援をリンケージさせるというのは、それだけ日本が大国というか、国際社会の中で認められることになる。単なる成金趣味の経済大国ではなくて、もっとある種の尊厳を勝ち取るためには、むしろ絶好のチャンスだという気がしますけどね。ですから、それは日本だけが突出するんじゃないくて、西側諸国と協調してこの問題をやる必要があるんじゃないかと思うんです。

飯島 本当はなかなか難しい。日本人の感情からすると、まだソビエト抑留みたいなことを、きのうのように思っている人たちがいる。シベリアぐらいは日本が何とかしてあげなきゃいけないんじゃないかぐらいな気持ちを持って、なかなかそのコンセンサスに手間がかかるだろうと。

中川 今、中嶋先生が全体的なことをいわれて、私も大体賛成ですけれどもね。

やっぱりソ連というのは本当にどうなるかわからない。ソ連がどういう形で固まるにしろね、まあ一〇年ぐらいかかるんじゃないかと思っています

ね。中国と比べても、ずいぶんソ連のほうが混沌としてますね。

日本はもう大国なんですから、外交上の要請が幾つも出てくる。例えば何時のロシアに対しても、幾つかの要請が平行して出てくるわけですけどね。その間にいろいろ段階が違うのもあれば、時期が違うのもあれば、要するに複眼的に対処していくべきでね。一つの問題だけを、これを解決しなきゃどうしても前に進めないとか、そういう単純な考え方というのは、やっぱり取るべきじゃない。

領土問題というのは、やっぱり日本としては、ひとつの怨念ですね。しかし解決できるかできないか、これは長期的な目標として持っていればいい。当面の問題についてはね、それとまた違う行政もあり得るんですね。ことにソ連が本当に困っているんならそれに対して援助しよう。それから、ヨーロッパの国々が崩壊してもらっちゃ困るということ、急遽支えなきゃいかんということね。そういう国際社会を挙げての動きがあれば、日本はやっぱり大国としてそれに応分の寄与をしなければいけませんね。そんな意味で、ほかの国よりは、ことロシアに関しては複雑なアプローチをしなきゃいけませんね。

平野 そうですね。ソ連については、構造上の変化というのがあったんですね。その構造上の変化を日本の政府と国民がどれだけきちっと認識しているか。

つまり冷戦構造があった時代は、極東でもアメ

リカとソ連が角を突き合わせていましたから、日本はアメリカとの同盟関係から日米対ソ連という構造がありましたでしょう。

それが、冷戦構造がなくなってしまうって、むしろアメリカがロシアを支援しようという形になって、ロシアとアメリカが近づくような構造ができて、その中で「それじゃ日本はどこに身を置くんですか。どういう政策を取るんですか」と言われたときに、どうも頭の中はまだ昔の対米一辺倒ではないけれども、アメリカに従っていけば間違いないんだ、という構造があるような気がするんですね。

しかし、それだけアメリカは日本のことを思っているのかどうか。そこをもう一回、思い直してみる必要があるんじゃないか、という気がするんですね。

日本の対口外交にも問題

飯島 ただちょっと非常に俗っぽい話で恐縮なんですけど、例えばエリツインさんをどういうふうに判断したらいいですか。「日本」とか「ゴルバチョフ」と言っていると、どんな機嫌のいいときでもすぐ怒っちゃうという小話があるんだそうですね。(笑い)。韓国へも中国へも行ったというのもの、

つまり日本を避けて、アジアに対する興味、それは単にお金のことでなくて、アジアに対するいろんなアプローチということは、絶えず考えているわけなんじゃないかな。

中川 エリツインがいったいどういう頭の動きをしているのか。一九九二年の一月初めには、ニューヨークで宮沢さんに、「九月の中ごろがいい。その際においにやろう」ということで、日間で決めてやっていた。あのときは確かに訪日に熱意があった。それでそのときは、日本との間にどんな問題があるかということぐらいはわかっていたわけですね。したがってある程度の自信があった、積極的にそういうことを考えていたわけですね。

それがわずか八か月の間に、日本に来るのを急に断って「日本はけしからん」と怒るといのはね、いかにも小児病的だね。それだけのことを日本側としては特にしているわけじゃなくて、あのとき渡辺さんが行って話したのは、「四島の主権を認めてくれれば、あとの返し方はいくらでも相談に応じます」と。渡辺さん自体は緩やかな態度を取ったと思っていたわけですね。

ところが、それが気に入らんということでもなくなってきたわけだね。むしろ国内事情で批判が強くなり、「領土を売るとはなんだ」というようなことで、彼の政治的地盤を覆そうというような右派の反発があって、それで来れなくなったんだね。飯島 国内の政治の基盤が揺れ動いている、ということですね。

平野 私、ちょっと違う見方をしているんですけども。日本の官僚の頭のよさがエリツインを追いつめてしまったんじゃないかな、という気がするんですね。

それは九二年七月のミュンヘン・サミットですね。あの前後の動きから読んでるんですね。

その前に、宮沢さんがミッテランと会ったり、コールと会ったり、あるいはブッシュと会ったりですね。要するにサミットに参加する各国の首脳と会って、領土問題についての日本の立場の支持を求めましたね。それで、少なくとも表向きはみんな支持したんですね。

そういう形で包囲網を作ってミュンヘンに行き、エリツインを呼んで、「さあどうだ」と言ったら、エリツインがパンとやったわけですね。「これはこういうところで話し合う問題じゃない」というわけです。あのあたりからどうもシナリオが崩れてきたような気がするんですね。

それでちょっと飛躍しますが、私が心配しているのは、今年のサミットは東京で開かれるんです。今までのヒューストン、ロンドン、ミュンヘンの例からいうと、エリツインを呼ばなきゃいけないんですね。呼ぶためには一種のセレモニーみたいなものがなきゃいけないですね。今まではエリツインは「嫌だ。行ったら領土、領土と言われるから行きたくない」と言っていたので、呼ぶためにはいったい何をやらなければならないか。そこでちょっと難しい問題が出てくるんじゃないですか。

中川 エリツインの訪日延期については、確かにエリツインの側にも問題がありましたけれども、やっぱり日本の外交姿勢にも非常に問題があったと思うんですね。



その点で平野さんがおっしゃったように、ミュンヘン・サミットでの話も渡辺外相の直前の訪ロも両方とも必要なかったと思うんです。いわば彼の来日を求めることが必要なのであって、その次に交渉段階があって、やがて領土問題にいくべきです。

それを、彼が訪日できないようにしたというのは、やっぱり日本の対ロ外交に、かなりの問題があったんじゃないですかね。お客さんが来る前から辛くしちゃったわけですよ。(笑)

ですから、エリツインがそういう態度に出ざるを得なかったというのは、もちろん、ロシアの内政問題もあって彼の政権基盤が弱いこともありますけど、やっぱり外交として見るとね、それはいい点を点つけられない。

飯島 国内問題として見ても、ちょっと宮沢さんが焦ったんですね。要するに政治的基盤が弱くて、どうも国内のどろどろしたことができない。ノーサンキューだ。それからブッシュと世界的なアピールが成功しなかった。やっぱりこれは北方領土だと。

中川 エリツインが日本行きを断ったということですね。「あれは無礼だ」というような気持が国民の中に相当ありますよね。

それからもうあんな国に何も強いて援助する必

要はないんじゃないか、というような気持ちも出ているようで、ちょっと怖い。

飯島 ただ、さっき平野さんがおっしゃったように、ヨーロッパは陸続きですが、日本へはまだ難民は来ないわけですよ。ドイツなんかは大変で、ヒトラーなんか出してくる。それからどうもイタリヤもムッソリーニ礼讃の動きが出てきたり、なんかちょっとヨーロッパはきな臭い感じがするんじゃないかも。

どうですか、一方ではECなどという香り高いものがあって検討しようとする中で、どうもわからないんですが。

ECの統合もぎくしゃく

平野 ヨーロッパを中心とした世界が、たぶん二〇世紀の一番最後の十年に入ってから加速度を増しすぎたんじゃないかと思うんですね。例えばドイツも将来的には東西ドイツを一つに統合したいという気持ちがあったんだと思いますし、それからもちろんECは経済統合から始めて、進んだ統合へ進もうというプログラムを作りましたしね。

それからいざ東ヨーロッパ、ソビエト圏も民主主義に動くだろう、という読みはあったんでしょうけども、早く来すぎたんですね。三年から五年早く来すぎたんじゃないかと思うんですよ。

それで、準備ができてなかったもんだから困っている、という状況だろうと思うんですね。九三

年の一月一日をもってECの市場統合が完成したということになっているわけですから、本来ならば花火を上げてお祝いをしなきゃいけない。けどみんなお祝いしようっていう気持ちないですね。

なぜかと言うと、ドイツなんかは、先ほども申し上げたように、年間十五万人も外からやってくるわけですよ。

それもドイツ基本法、憲法にはかつてのナチスの時代に、周辺の人々に迷惑を与えたその懺悔の証として、「政治亡命を求める人間には門戸を開放しなきゃいけない」という規程がありますでしょう。

その政治亡命を装って経済難民がやってくるわけですよ。それじゃあ困るからというんで、憲法改正の動きが出てきましたね。

要するに、本来祝うべき年を迎えたヨーロッパが、何となくお祝いムードじゃなくなっちゃったというところに、ことしのヨーロッパの特徴があるんじゃないかと思うんですね。やっぱりことの最大の焦点は、憲法改正だろうと思うんですね。

改正の問題点としては、経済難民の締め出しという形で閉鎖的なのが一つ。それからもう一つは、これは日本との比較であとで先生方に論じていたと思いますが、PKOに参加する前に、まず憲法を改正して海外派兵ができるようにしようという、その手続きですね。そのあたりが焦点になると思います。

中嶋 理念としては、統合という原理は非常に立派なものもありましようし、香り高いと思います。しかもヨーロッパの場合、戦後の石炭共同・鉄鋼共同体から始まって、ずーっとその蓄積がある。六〇年にECが出来て、そして今回までの経過があるけれども、やっぱりその歴史のスケジュールと、今、平野さんがおっしゃったような世界の激動との間尺が合わなかった、ということに悲劇があると思うんです。

フランスのインテリなんか、みんなミッテランの政策に反対なんです。あれはもうEC関連とミッテランなどが結びついているのであって国民を全く置き去りにして進めようとしていると。

というのは、国民の大半にものすごく抵抗があるんです。ですからその理念と実態との乖離というものも、これはさっき我々が、政策としての対口支援をしようと思っても国民感情がそうはいかないのと同じような問題があって、非常に難しい。

ということは、今の世界はある種のナショナルイズムの時代なんです。ある意味では民族が最も原点に戻って、アイデンティティーを求めている時期に、このEC統合という高邁な理念でね。これはタイミングが非常に悪かったんじゃないかという気がするんです。

中川 今のマーストリヒト条約がちょっと早すぎた。普通ならあれでいいんだけど、東ヨーロッパの開放とかソ連の崩壊とかいうことが平行して起きたもんだから、それと一緒にゴタ

ゴタゴタゴタしてしまった。



平野 そうですね、もともとECというのは、西ヨーロッパのお金持ちの国で、政治も安定した民主的な国たちの仲よしクラブだったんですね。それが今、スペインを入れてみたりポルトガル

を入れてみたり、ギリシャを入れてみたりしているうちに、ECの中で一種の南北問題が起きてきたんですね。そこに東ドイツが西ドイツと一緒にるので、自動的にECに入りましたでしょう。そうすると東ドイツは経済的にレベルがずーっと下ですから、さらにまた南北問題を抱えてしまった。東ドイツが統一ドイツで入ったあと、今度はハンガリー、ポーランド、チェコスロバキアも入れてくれという話になったし、そのうちロシアまでも入りたいと言って迫ってくるんですよ。

そうすると「待てよ。もう一回考え直してみたほうがいいんじゃないかな」と、みんな本当は思っているんですね。だけでもEC推進論者、特にEC官僚たちは、「そうは言っちゃおれない。自分たちが最初に考えた構想を進めなきゃいけない」というふうに強い思いを持っています。その辺で国民と官僚との間にズレが出てきた、という状況だろうと思うんです。

中川 今のヨーロッパ自体が、ユーゴのようにヨーロッパの一部であるにもかかわらずどうにも

できない、お手上げのような状況でしょう。あんな状況のとき、一方でヨーロッパ統合を進めるといのは、ちょっと滑稽ですよ。

平野 ただ、航空機が発達しますと、パリ・ロンドンなんて四十分ですからね。東京・大阪なみでしょう。東京から大阪まで行って、大阪空港でパスポートを見せて、大阪田という田に替えてですね。そうでないとタクシーに乗れないなんて、これはおかしい話ですよ。

だからもう生活は便利にしましょう。できることなら統一の通貨で、パスポートもなしで旅行できるようなという発想で始めて、実際そうなったんですね、ほとんどね。もうカードで買い物すればいいわけですからね。だから、それ以上のことはもういいじゃないかと思っている人も、いることは確かなんです。

はがれた共産主義のニカワ

中川 長い眼で見て、やっぱりヨーロッパに統一の動きがここまできたというのはね、これはやっぱり世界的に見ても大きなことだと思います。だから、ほかの地域もだんだんそういう方向に少しずつ踏み出していくんじゃないですか。

飯島 さっき平野さんがおっしゃる通りに、東京・大阪ぐらいのところが「国だ、国だ」というのはおかしい話で、私生活としては非常に不便なことですね。

平野 ベルギー、オランダ、ルクセンブルグに

なっちゃうからね。

飯島 ベルリンの壁がなくて平和になったというにもかかわらず、地域紛争という、次のステッブへのちょっとしたジグザクがあります。こういうものはエンドレスに続くものなのか、どういうことなのか。

中川 まあ一種の地震でしょうね。地殻変動でね。

異民族、少数民族を抱える国はたくさんありますね。フランスだって、スペインだって、イギリスだってそうですね。にもかかわらず、こういう長い歴史と伝統がある国はユーゴあるいは今の旧ソ連もそうですね。人爲的に無理やりに統合した。

ユーゴの場合は恐らく第一次戦争が終わったときのドサクサで、南スラブ民族をみんな集めて国を作ろうということで、あんなふうに異様な単位の国々が六つ集まってユーゴスラビアを作っちゃったんですね。したがってあれは共産主義だから、ことにチトーさんがいたからまとまっていたんですね。

その後、「にかわ」というか何というか、それがもうなくなっちゃうと、これは当然分離すべき運命にありますね。それから旧ソ連なんて正しくそうですね。だからこういう国は、地殻の変動があるとなつぱりバラバラになる。

一番大きな理由、共産主義、共産党というものは、要するに消滅しちゃったということで、今までそれをひとまとめにして一つの国にしていたそ

の「のり」というか、「にかわ」というか、それがなくなっちゃってバラバラに。

中嶋 今おっしゃったとおりだと思うんですけど、国際関係のことを大学で教えるとき、学生にこういう説明をしているんです。

二〇世紀というのは、戦争と革命の世紀だ。ところがその戦争が——この場合戦争というのは世界戦争なんですけど——幸いにして回避できるようになった、つまり脱冷戦。もう一つ、革命というのは、結局社会主義がだめだったことがわかって、脱社会主義でしょう。この二つのシンボルが崩れたわけですから、そのシンボルが崩れたことによって、しばらくその残務整理などが必要になるわけでしょう。おっしゃるように冷戦構造があったときはお互いに抑制が効いて、封じ込められている国ほど、タガが緩んだ途端にそういう問題が出てくる。

考えてみると今、世界に一八〇ぐらいの国があるんですけども、それは大体二〇世紀の革命と戦争の結果出来た国が非常に多い。一方、民族というの、世界に三千三、四百あるらしい。それを戦争と革命の結果によって、三千幾つかの民族を一八〇に無理して封じ込めたわけですね。この無理がやっぱあちこちで今いろいろ問題を起こしているわけで、その無理が解消されてもういっぺんある種の国民国家的なものの再編成か、さもなければ統合ECみたいな形になるのか。そこへいくのが二一世紀じゃないだろうか、こんなふう

成るか中国の壮大な実験

飯島 非常に明快じゃないですか。(笑い)

さて、この辺で話題を中国に移してもらいましょう。

中国のスケールの大きさに対しては、いつも脱帽しているんですけどもね。

さればといって、ポスト鄧小平が言われて久しいし、しかも先の一回四大会ですばつとした人事があり、さっき平野さんが、アメリカのことを若返りだと言われたように、本当に若返りなのか、中国も。いろんな現象を我々は部分的には知ることができただけでも、それをいったいどういうふうにとらえたいのか。この一年はどういうふうに展望したらいいのか。

中嶋 日本人の中国に対するイメージ、それから対中感情、それから中国に対する認識、これらは非常に分裂したままですね。

例えばアメリカなんかと比べると非常に際立っている。こんなに近くて交流がある。だから交流があればわかり合える。しかし逆に交流があるために余計わからなくなっちゃった。

私自身、中国に行ったらわかるかなと思って、回数を重ねて中国に行ってもなかなかわからない。例えば改革・開放と言っている中国が、どうしてあんなに軍事力を増強してアジアに進出しうとしているのか、わからないですよ。

それは、結局は内政の対外的反映だというふう

に解釈せざるを得ないですね。国内政治においてやっぱり一党独裁を取っているわけで、天安門事件というのは、やっぱりあってはならないことをやっちゃったと思うんですよ。そのいわば体質というものが、対外的にも表われているんじゃないか、というふうに解釈せざるを得ないんですよ。

そこで具体的にいろいろ見てみたいと思うんですけども。先の一四回党大会なんですが、これは日本の新聞報道もNHKを含めて、従来に比べれば的確な報道をするようになっていっていると思うんです。

にもかかわらず、人事の若返りといわれると、その面だけに目が移っちゃうんですね。ちょっと歴史的に振り返っていただければいいんですけども、中国ではその大会のヒーローであった人が、その後全部失脚ないしは批判されているわけです。

こんど政治報告をやったのは江沢民でしたけれども、実態は鄧小平一色と言っているくらいだろうと思うんですよ。特に鄧小平理論とか鄧小平思想ということ、あそこまで協調した。それから深圳の経済特区なんかに行くと、昔の毛沢東ぐらいの大きな鄧小平の看板が出てくるということ。これはある意味では、ポスト鄧小平に不安をいさなうんですよ。ということはここまで鄧小平を礼讃するということは鄧小平にすべての責任をなすりつけて、もしだめになったときの責任は鄧小平さんに取らせるといって、いわば中国の政治文化みた

いなものが依然として残っているということがあります。

これを具体的に見てみますと、前の大会は誰がヒーローであったか。

一三回党大会というのは（一九八七年）、趙紫陽がヒーローだったんです。今回は社会主義市場経済ですけれども、あのときは社会主義初級段階論、そして沿海地区経済発展戦略といって、外向き型の経済をやり始めた。ところが今回の大会は趙紫陽の政策を受け継ぎながら、政治的には趙紫陽を失脚させたままで、絶対に許さないとやっている。

その前の大会（一九八二年）は、胡耀邦がヒーローだったんですよ。胡耀邦はもと共産主義青年団にいた時分からずーっと鄧小平さんの最も信頼する部下といわれたが、その胡耀邦があいうことになったでしょう。

その前は華国鋒さんですね。ちょうど大平政権の時期に日本に來まして、私は武道館で大平さんの葬儀に出て、この人は国へ帰れば消えていくだろうなと思った、正にそうだったんですけれども、あのころは華国鋒は有名な指導者であった。

その前は王洪文が副首席として颯爽と登場して、中国は人事も若返った。王洪文はやがて四人組の一人として、そして昨年の八月でしたかね、惨めな死に方をしましたね。

その前の九全大会は誰かという和林彪なんです。その前は五六年、ずーっと遡るんですけれども、劉少奇がヒーローだったんです。

そうすると四九年の建国以来、すべての指導者は失脚しちゃったわけですね。

ですから、そういうことを見ていると、そう一筋縄じゃないんじゃないかということですね。ひとえに今の社会主義市場経済なるものがうまくいくかどうかにかかっていると思うんです。

この間、中国は世界的な軍縮傾向にもかかわらず、軍事費を天安門事件以来五〇数%増強しているんですね。毎年一二から一四%、国家財政が赤字であるにもかかわらず、それほど軍事力を増強してましてね。一種の軍事・物神崇拜というか、「政権は銃口から生まれる」という思想を、対内的にも味わったわけです。対外的にもそういうことをやっているんじゃないかという気がしましてね。これはアジアの国々にかなり脅威を与えるんで、今後中国の動きはそういう意味でも目が離せないわけですね。

それから先ほど言いましたように、それと関連して、今、軍の中にパージが行われて楊ファミリーが追放されてますけれども、それがどこまで行くかですね。

さらに中国の改革・開放はものすごく加熱しているわけで、ちょっとバランスが崩れると大変なことになる。それからいわゆる民主化運動を求めた人たちの、潜在的な力というのは、今は押さえられていますけれども、無視できないと思うんですね。

だから、中国は大変壮大な実験なんですけれども、これがうまくいくかどうか。次の党大会は、

香港返還の九七年ですけれども、そのときまで鄧小平氏が元氣かどうかという問題もあります。だからそこをもう少し見きわめないと、今の中国はこのままいくかどうか。ましてや社会主義国がみんな崩壊しているし、アジアの社会主義国・ベトナムも市場経済にしようとしていますね。残っているのは中国、北朝鮮というところなんですけれども、こんどの大会だけでは断定できないと思っています。

わかりにくい中国の目標

中川 今、中嶋先生から大変面白い有益なお話があったわけです。やっぱり、中国というのはそのぐらい長く見なきゃいけないですね。長く見てもっと遡れば、その前の蒋介石から何から全部あるわけですけれどもね。

問題は、中国をどういうふうに認識するかというところが大変大事です。同時にしばらく長い目で見れば、中国というのは常に移り変わっていくというか、要するにその権力者の興亡は正しく三國志的にいっているんですね。

だから日本がこれにどう対処するか。中国というものにどう対処するかというところに、日本にとって重要な面があるんですね。

やっぱり中国というのは日本の隣国で大変に大きな国ですね。これは日本にとって、良きにつけ悪しきにつけ影響力の大きな国で、これとの関係というのは、日本の外交にとって、アメリカ、ソ連

と並んでの大きな要素であるわけです。アメリカはクリントンとかなんとかいうことで政權の交代があるけれども、大体様子は予測されるし、わかりますね。

それで、あとの二つがわからなくなっているわけですね。旧ソ連と、それから中国もそれほど混沌とはしていないけれども、相当激しい移り変わりがあると予測しなきゃいけないですね。

それから中嶋先生が言われたように、このごろなんだかその薄気味悪い軍備拡張というような動きもあるし。だから、そういうところを見すえながら、日本としては、非常に大きなウエイトを占めるものとして、中国に対処していかなきゃいけない。

日本外交の基本としては、やはり米、中、ロシアですね。それから国はそれほど大きくないけれどもやはり韓国。この四つが明治以来の日本にとって、非常に大きなウエイトを占めた国です。幸い戦後はアメリカとは非常にいいですね。ソ連とはどちらかといえば悪いんですが、喧嘩などすることなく来てますね。今後もやっぱりこの方針を続けていかなきゃいかないうふうに思っています。

中国の場合は台湾という問題があるんで、これは大変難しいですね。本当なら台湾とも仲よくしなきゃいけない。こと経済に関しては台湾と仲よくやっているわけですけど、こと政治になると、アメリカのようにドライに割り切って、台湾は台湾、中国は中国というふうにするわけにはい

かない。というのは日本は平和政策である以上、第七艦隊を持ってきて押さえるというふうにはい

かんわけです。飯島 平野さん、ヨーロッパからお帰りになってきたばかりで、外国とかかわりの中で、中国をどう見えていますか。

平野 いや、中国は本当にわからないですね。わからないというのは、一九八九年六月に天安門事件が起こり、それが一種のきっかけになって東ヨーロッパで民衆の蜂起があり、最終的にはソビエトが崩壊し、ユーゴもああいうふうになっちゃったんですね。

そういう一種の歴史の流れというきっかけみたいなものを作っておきながら、自分の国は全くそれとは別のところで、国を守り、体制を守ってき

たわけでしょう。

中国だって、基本的には多民族国家ですよ。そういう分離の動きがあっても決しておかしくないだろうけども、少なくとも表には現れてこない。それが一党独裁の体制によるものなのか、それともそうじゃない何か中国の人々を結びつける強い求心力があるのかどうか、その辺がまずわからないんですね。

それからもう一つは、いったい今の中国は何を目指しているのかというのがちょっと読みにくいんですね。経済発展がすべてに優先するのか、そうでなくて富国強兵で軍事的な発展も一緒に考えているのか、その辺がどうも読みとれないところがあるんです。

それからもう一つは、どういう原則があるのか、というのがわからないんです。貿易の数字を見てましたら、日本との貿易の伸び率よりアメリカとの貿易の伸び率がこのところすごく大きいでしょう。

それから経済発展のスピードと石油資源の関係ですが、生産の伸び率を比べてみたら全然違うんですね。恐らく数年以内に石油を外国から輸入しなきゃならないことになるんじゃないか、というような感じがしますね。その辺をどういうふうに考えているのか、本当にわからない国ですね。

日本は座標軸をしつかり

中嶋 だからね、常識で考える以外にないと思うんです。しかし、中国という国に対して日本人は特殊なメンタリティがあるから、常識のレンズが曇っちゃうんですね。

やがて経済が発展すれば、当然多面的な政治的要求が出てくるだろうという、こういうふうな常識で見ていくと、意外に僕はわかるんじゃないかと思ってますね。

ですから、今おっしゃった経済発展と富国強兵かと、正に両方考えているんじゃないでしょうか。鄧小平さんの意識の中には、いわゆる治安に対する抵抗ということがある。改革・開放は進むんですけれども、やっぱり基本的には改革・開放派といえども、中国のいわば主権とか、権威の増大というものを考えると思うんですね。

そういう意味では、中国が改革・開放を進めていても、社会主義・共産主義を標榜している限り、西側諸国とは限界がある。その限界の中で、中川先生がおっしゃったような、日本の立場というものを発言していく。

私はそれに付け加えれば、国際社会の中での日中関係という視界が必要だと思うんですね。

そうすると、日本というのは座標軸をはっきりさせなきゃいけないんです。基本的には西側諸国の一員だ、という点をはっきりさせることですね。

そうである限り、日本は中国問題を日中だけで背負わないで、グローバルな課題として考えていかないと、日本だけが中国をマネージしようと思ったらこれは大変で、とてもやりきれませんよ。

ひょっとすると、中国問題はロシア以上に厄介なことになりかねません。今は民族問題も押さえていますけど、しよっちゅうチベット辺りも戒厳令が出てますしね。

それからの問題を含めて、やっぱりグローバルな課題の中で、西側諸国の一員であるという立場をはっきりさせて、日本はきちんとするべきんじゃないですか。そのうえで日中友好を図るということをはっきりさせればいいんだけど、その基本的な原理がぐらついているものだから、つい誤解を受けるんじゃないかと思うんです。

話は別ですが、ご訪問中のときの天皇のお言葉の中に「中華人民共和国」という言葉がないんで

すよ。「中国」というと、これは台湾も含んでいるんですね。

中川 各国元首のなかで、イギリスのエリザベス女王が北京を訪問されたのがもっとも早いですね。

平野 やっぱりどっちが先に頭を下げるか、あるいは瞬きをしちゃうかという、そういう感覚で見てるのかもしれないですね。

飯島 これは日本にとっても、やっぱり日中の関係は宿題であり、避けて通れない。お隣の国ですからね。

中川 歴史も長いですからね。

飯島 だから、中国研究者、自称中国研究者が増えましたね。結構な話じゃないか、と私は思ってるんですけれども。

あんまり方向を狂わさないで、日中友好の長い歴史を、フランクに受け入れることが大事だと思いますね。

中川 冒頭で中嶋先生が言われたアメリカと中国。アメリカの対中政策が民主党政権で厳しくなると、確かに日本はちょっとジレンマが出てきますよね。だから日本は旧ソ連との関係に加えて、対中国関係で西側諸国との間にちょっと亀裂が出てきますね。

中嶋 安全保障の問題、日米安保体制の問題も含めて、十分にやっぱり協議していかないと。

中川 そうそう。安保の問題ね、安保の問題はちょっと議題にならなかったけれども。

安保はどうしても継続の必要がある。というの

は、日本は非核国ですよ。それで中国も核を持っています。それからロシアも核を持っています。

それで、やっぱりアメリカの核で日本を防衛してもらわなきゃ。日本としては万が一あいう国から脅かされた場合に、いかに日本が軍備を持っていたても、自衛隊ではどうにもならないんでね。

飯島 クリントンさんが出てきているんな影響が出てくれば日本の立場もさることながら、中国の立場は非常に微妙になってくるわけですから。

中嶋 中国は今一生懸命、日本を誘っている。

中川 日本を味方につけて、アメリカとのバランスを取りたいとね。

中嶋 その中で日本は、はつきりさせないとね。

南北朝鮮が反日で結束も

飯島 中国の話はエンドレスになるんで、この



辺で。アジアの残された問題として朝鮮半島の安定というのがありますね。国際的に見て、やはり日本に対する政治的手腕を問われているような気もするんですが、それはいいすぎですか。

中川 北朝鮮との外交交渉ね。今までなんやかんやいって時間稼ぎみたいで引き延ばしになっているけど。向こうの情勢がもっと変わらなきゃ。

もっと変わって話し合いができる、八割ぐらいまで普通の国になってくれなければできないように思いますね。

飯島 やっぱ韓国とロシア、韓国と中国みたいな形が、行き来するようになって、そういう中でどういふふうに変化するというふうにお考えでしょうか。

中川 いわゆるクロス承認ですが、今のところ北朝鮮と日本とか、北朝鮮とアメリカとの関係ができない。北朝鮮と韓国もできませんけど。だから、北朝鮮だけが孤立して残されたような格好になっていますね。

これで時間をかけていけば、北朝鮮が究極的には折れるか、北朝鮮の政権がちょっと今のような形でないものになるのか。なんかそっちのほうの変化が先なんじゃないですかね。

飯島 統一なんかはどうでしょか。

中川 統一というのは、恐らく韓国は今の政権とはできないんじゃないですか。

飯島 やっぱ朝鮮戦争というのは大きいですが、傷跡が。

平野 そうですね、難しいですね。北朝鮮は次の後継者も決めているわけですしね。ですからよっぽど内部的に体制がちっと変わるというようなことがあれば別ですけれども、そうでなければ、時間はかかりそうですね。

ただ、日本と北朝鮮が外交的な関係を強めていくことに対する韓国側の抵抗というのは、昔に比べれば少なくなっていると思うんですね。

ですから、今国交を開くということじゃなくて、例えば、昔あったような貿易事務所から始めていくみたいな、そんな形でやっていくことはかわらないんじゃないですか。

中嶋 ただ、南北朝鮮というのは、ひょっとすると反日でまとまるというような感じがしますよね。そういうことを常に念頭に置いておく必要がある。

飯島 私なんか常にそう思いますよ。

中嶋 ですからあんまり関与できない。ものすごく対立してるかと思うと、急に首脳会談があったり、そういう構造がありますからね。北朝鮮はソフトランディングしていく方法を何とか模索するということなんじゃないかな。

ですから恐らく中国は、実質的にはもう社会主義は崩れているという気がする。北朝鮮は最後まで残るかもしれない。そこがどういう形になるか。

意外に北朝鮮というのは、民度という言葉を使って言えないのかな、学習とかね、非常に高い水準をもっていますから一種の推進力みたいなものがありますよね。

平野 その場合、北朝鮮を国際社会に引き出す役割と言いますかね、その国際社会の間尺に合わせるようにやっていくという役割は、どこなんでしょう。

中嶋 アメリカが第一じゃないでしょうか。北朝鮮もそれを一番期待しているんじゃないでしょうか。

ですから、これはやっぱり日米が、中川先生がおっしゃったように、この問題でも緊密な連携を作る必要があるんじゃないですか。

中川 それから、中国とかロシアがね、うしろからいろんなことで説得する可能性はあるんじゃないですか。もうちょっと現実的な政策をとれとか。

飯島 これはやっぱりことあたりの推移を見守るというか。

中川 そうですね。

飯島 あと、アジアで残っているのはやっぱりカンボジアですね。

どうなる日本の常任理事入り

平野 カンボジアは、私は面白いと思って見てるんですけど。

クリントンが、日本とドイツを国連の安保理の常任理事国にさせるべきだ、ということを選挙中に言っていましたね。それで、アメリカのワシントンにあるシンクタンクの一つがつい最近、報告書をまとめましてね。それに、やっぱり目標は、日本を国連の安保理の常任理事国にすることなんです。

ただ、そのための条件というのがありますね。国際平和の維持というところで、ポジティブな貢献をすることだったんです。要するにPKO法案を可決して自衛隊をカンボジアに出しますと、あるいは途中フィリピンに寄って物を輸送しますと

か、ソマリアにも行きますとかね。

そういう形で日本に実績を作らせて、それで、「わかった。それじゃあ敵国条項を削除して安保理の常任理事国にしましょう」という、そういう図式があるような気がするんですけれども、どうですか。考えすぎですか。

中嶋 そうですね、その場合、例えば中国がどう出るか、という問題がありますね。

中川 さきの天皇ご訪中で、今までにない親交関係が残っている。

今の段階だったら、中国は拒否権を使うというか、あるいは「拒否権を使うぞ」ということでおどして、日本が安保理・常任理事国になるのを阻止することまでは、ちょっとやらないんじゃないですか。もしそれが世界の世論になってきた場合にね。日本を安保理の常任理事国にするという考えは、相当ほかのG7のほうの国々には、ある程度抵抗がないようですね。

それからアメリカは、少なくとも理論的にはそれに賛成していますよね。あといろんな尾ひれがついて、そっちのほうがある程度問題があるでしょうがね。

むしろ一番心配なのは、英仏じゃないですか。

英仏は非常に常任理事国制度をいじられるのが嫌いなんです。自分たちの地位が危なくなるといふんでね。

もし日本だけを常任理事国にして、一か国だけ増やすというだけだったら、わりに賛成する国が多いんじゃないですか。しかしドイツがもう名乗

りを上げていますからね。ドイツを入れると、英、仏、独と、「西ヨーロッパから三か国も常任理事国になるというのは、あまりに多すぎるじゃないか」という論が必ず出てきますね。そうするとインドとかブラジルなんかが待ち構えていますね。

こういう国が入ってきたら、今の国連安保理がもう一〇か国位増えて二五か国ぐらいになっちゃうんでね。あんまり増えると能率が悪くなるのにならず、票を集めるのに苦心しますよね。

そんなことで国連のメカニズムを少し変えて、その中に日本の安保常任理事国入りも当然入るといふようなことが一応いろんなシンクタンクなり、アドバイザリーの中にあるにはある。クリントン自身の頭の中にも少しはあるかもしれませんね。だから、これはことし割に芽を吹く問題じゃないでしょうか。

中嶋 僕は、そんなに急がないほうがいいんじゃないかと。まずPKOで、つまり日本は本当に文字どおりのPKOをやっているんだという、そういう意味ではカンボジアがうまくいけばテストケースですよ。これでアジアのほうも安心するだろう。

そういう意味できちんと国際貢献をやってから、その問題を十分に出していったほうがいい。あまりもの欲しげにやるのは、逆に反発を招きますしね。それから日本の大国化に対するアジアの懸念もあるし。

カンボジアの問題で、私ちょっと最後に申し上げ

げたいことは、カンボジアというと、みんなPKOの問題に目がいっているわけですけども、あそここのブノンペンを含め、実行支配しているヘンサムリン政権の与党の人民革命党は、すでに去年の十月に臨時党大会を開いて、市場経済の導入と複数政党制の導入、つまり自由化、民主化しちやうっているわけですよ。

ということでは、将来、本家本元のベトナムがそうなる可能性は目に見えている。アメリカはそれで非常にベトナムとの関係を強化していますよね。かつてのベトナム戦争の敵同士であるにもかかわらず、逆にそのことが両者を結びつけているような気がします。

そういう意味ではPKOだけではなくて、インドシナ半島全体の安定に日本は経済的にも外交的にもどういうふうに貢献していくのか、ということを含めて考えて、それで初めて国連の常任理事国という問題が出てくるんじゃないかと、そんなふうに思います。

中川 それはいい試金石でしょうね。

飯島 そうですね、私はインドシナ半島というのは、やっぱり二〇世紀最後の宿題ですね。ヨーロッパ、アメリカの食い荒らしたところを日本が一生懸命に後始末するという姿勢が大事だと思いますね。

国際新秩序第一歩の年

中川 今後の世界は、地域主義という安全保障

の仕組みがだんだんできてくる。そうしないと安全保障問題を身近に感じませんからね。

ユーゴなんていうのは面白い例ですけど、地元のヨーロッパがどうにも処置しきれないでゴタゴタしているわけですがね。ああいうことを何とか取り仕切れるようにならなきゃ、ヨーロッパの地域的安全保障も絵に書いた餅のような感じがしますけどね。

アジアなども、やっぱりその意味でカンボジア問題というのは大変大事な問題でね。これを何とか処理できれば日本の株も上がるし、インドネシアとかASEAN諸国の株も上がりますしね。ベトナムも、それから中国だって平和に貢献するんだという一つの実績ができますよね。

恐らく今年には選挙が行われるでしょう。選挙が行われて、ポル・ポトがどうするか、一番最後の段階ではポル・ポトも、置いて行かれちゃいけないからと、入り込むという希望的観測もありますけどね。今までの実績からみるとわからんですがね。

飯島 選挙をつぶそうと考えてるらしい、というのを聞いたたりなんかしますんで。

この間、向こうの政党の人が来て会ったんですが、五月の総選挙はちょっと無理みたいなことを言っていました。

中川 カンボジアというのは、対日感情もそんなに悪くないし、そこにまあ実績を残して、そして単に紛争処理、戦争の残務整理だけじゃなくて、経済的にも力をつけていくように、自立的に

経済が機能するような形で手を貸すことが必要でしょうね。

飯島 ことしのトリ年は、国際情勢は大体今お話のようなことなんですけど、ひと言でいうと、どういうふうな展望を持つことができますか。

平野 大きな地震のあとの余震というのは、まだしばらく続くんですね。

冷戦構造が終わったあと、ヨーロッパは一種の市場統一の最初の年になったし、アメリカはその冷戦後の新しい大統領が出てきたということになって、次の枠組みみたいなものの模索を始めるだろうと思うんですね。

その中で日本がどういう国際的な役割を果たすことが求められるのかという、それが大きなポイントになるだろうと思いますね。

飯島 中川先生、どうですか。

中川 私は今、平野さんの言われたことに大体賛成でね。しいて言うならば、新しい国際秩序のスタートの第一歩、第一年と言いますか、そんな移り変わりの第一年になりそうな感じがしています。

中嶋 大きな世界的変貌というのが続いているが、ちょうど三年たったんですよ。正に転換期が終わってね。二一世紀的な秩序、システム、その最初の年になるんじゃないでしょうか。

飯島 どうも長いことありがとうございます。本当にお忙しいところをよく来ていただきまして。感謝いたします。

ISSN 0386-0345

昭和35年10月18日第三種郵便物認可
平成5年1月1日発行(毎月1日発行)

平成5年(1993年)

善 隣

INTERNATIONAL GOOD NEIGHBORHOOD

NO.187 通巻454



(社) 国際善隣協会

1